

※センターへの要望や提言を、という要請に応じて寄せて下さいました原稿を掲載させていただきます。

《言語センターに望むこと》

▶今度は、腹の底から困っている。

『NEWS LETTER』編集子からの便りの封を切ると、「言語センターに望むこと」「言語センターのあり方」「言語センターにもの申す」といった題の小文を書けという文字が目飛び込んで来た。本当に困った。人類学徒は、結構使い勝手がいいらしく、思いがけない原稿依頼も今まで随分舞い込んだ。端っくれでも、holisticをもって金看板とする人類学徒を名乗っている以上、できることなら何でも協力する「覚悟」はできている。だが同じ無理難題なら、いっそ「南ナイル諸語の擬似性接頭辞の変異に関する言語年代学的検討」ある

いは「日本語とスワヒリ語海岸諸方言における提題構文の比較」について手短に論じようという依頼—これだって相当なものだが—の方がまだしも始末がいい。猛勉強を始め、フィールドノートを片端から引っ繰り返してみたら、どうにか冗談位にはなるかも知れない。でも、今度の依頼には心底お手上げだ。「あり方」をよく知らないから「望む」こともなく、だから「もの申す」なんて大それたことは毫も思ってもみない。それで、困り果てた。

「答のない質問」とか、「質問のない答」という類はレヴィ＝ストロースお得意の神話分析の概念で、私もこれを玩んで楽しんだりもする。ところ

が、編集子の依頼は、封筒を飛び出した途端に私を鏡の裏側に封じ込めた。これじゃ、自分の頭に出来た池で溺れ死んだ、落語『頭山』の主人公だ。でも、落語じゃないからオチがない。で、困った。

人類学徒には、言語センターは最愛の妻でも、遠くから仰いで密かに憧れている妙齢の佳人でも、手強いオバサンでもない。時偶出会って挨拶すれ

ば爽やかだけれど、平素はすっかり忘れてる御婦人ってところ。彼女との間には何一つ困ったこともない。困ったな。

私のようにちっとも困らない所員が沢山いるってことが、一番困ったことに違いない。

(小 馬)